

7
[研究室だより]

研究室を訪れた人々 1998年度

1998年度も外国からの特別ゲストを招いて講演会や講義など、いくつかの催し物を開催することができた。簡単に、その記録を以下にまとめておくが、演劇関係の催し物（ユルスキー氏とガエフスキー氏）についてはロシア演劇を専門としている楯岡求美さんに、またメドヴェージェフ氏の講演会については来日中の同氏に身近に接する機会があった守屋愛さんに、別途印象記を書いてもらった。

ロシアの詩と演劇「セルゲイ・ユルスキーを囲む会」

1998年4月9日（木）午後4時30分—6時30分

於 スラヴ語スラヴ文学演習室

紹介 山之内重美氏（歌手・女優・ロシア演劇研究者）

セルゲイ・ユルスキー氏は、現代ロシアを代表する俳優であると同時に、作家・演出家としても活躍し、1998年度ロシア「黄金のマスク演劇祭」においてはロシア最優秀男優賞を受賞している。今回は日本の劇団の演出のための来日だったが、来日前に彼と親しいモスクワの文壇関係者より「日本で退屈するといけないからよろしく」という連絡が入り、急遽、ユルスキー氏と連絡をとり、研究室に来てもらえることになった紹介役として、ユルスキー氏と親しく、今回の日本滞在中の稽古の通訳をつとめている女優の山之内重美さんにも「友情出演」していただいた。われわれの研究室は演劇関係の付き合いがそれほど深いほうとは言えないが、今回のパフォーマンスはさすがに名優の誉れ高いユルスキー氏だけに、見事なものであり、文学・語学研究者にとっても優れた俳優のパフォーマンスを直に見ることがいかに大切か、痛感させられた。「会」の後は、本郷界限で例によって懇親会。さすが人気男優だけに、他大学から女性のロシア人研究者が何人も参加し、いつもとはちょっと違った雰囲気盛り上がる。

講演会「日露新時代を考える」

1998年7月2日（木）午後3時20分—5時30分 於 東京大学山上会館

講演者 和田春樹 東京大学名誉教授（元社会科学研究所所長）

A. パノフ 駐日ロシア大使

東郷和彦 外務省総括審議官

開会の辞 中村健之介（東京大学ロシア東欧研究連絡委員会代表）

歓迎の辞 蓮實重彦（東京大学総長）

司会 桑野隆（東京大学大学院総合文化研究科教授）

この講演会は、東京大学の様々な部局のロシア東欧研究者が専門の間の壁を越えて自主的に組織した学際的グループである東京大学ロシア東欧研究連絡委員会が主催したものだが、われわれのスラヴ語スラヴ文学研究室のスタッフも準備に積極的に関わり、当日もわれわれの研究室の多くの大学院生・学生たちの協力のおかげで、会を無事滞りなく進行させることができたので、あえてここに記録として留めておく次第である。

講演会には、ロシア史や国際関係、政治の研究者やジャーナリスト、学生などが来聴し、100名入る大会議室がほぼ満席になった。日露関係の歴史と将来について、パノフ・ロシア大使と東郷・外務省統括審議官は外交を担当する立場から、そして和田名誉教授は歴史学者の立場から興味深く示唆と洞察に富んだ講演をされた。知日派として知られ、日本語の達人でもあるパノフ大使は日本語で講演をされたが、そもそもソ連ないしロシアの大使が東大で講演をするということ自体、歴史上初めてのことのようである（未確認だが）。なお、3名のゲストによる講演の内容をもとにした論文が、その後、『世界』（岩波書店）に掲載された（東郷和彦「日露両国の信頼のためになすべきこと」1998年10月号、和田春樹「日露関係200年から見た新時代への変化」同年11月号、A.パノフ「露日両国のパートナーシップ構築へむけて」同年12月号）。

講演会の後には、山上会館1階のラウンジで引き続き3名の講演者を囲んでレセプションが行なわれ（青柳正規本学副学長より歓迎の挨拶）、日露両国の様々な分野に関わる多くの出席者が狭い意味での専門を越えて和気藹々とした雰囲気の中に談笑する機会を持つことができた。

特別講義「ロシア演劇再考」

ヴァジム・ガエフスキー教授（ロシア国立人文大学演劇批評学科主任）

1998年7月21日（火）午後4時30分—6時30分（講義はロシア語、通訳なし）

於 スラヴ語スラヴ文学演習室

ヴァジム・ガエフスキー氏は、ロシア国立人文大学演劇批評学科主任として教鞭をとるかたわら、現代ロシアを代表するバレエ・演劇評論家として活躍している。今回の来日は、沼野が企画委員として関わったアリオン音楽財団による「東京の夏音楽祭」〈ディアギレフ——バレエ・リュスの20世紀〉のためのものだが、この機会を利用して、われわれの研究室にも来ていただき、特別に講義をしていただいた。演劇はわれわれの研究室にとっては重要なジャンルであるにも関

ならず、教官の間に専門家がいなかったため、弱点となっていた。それを補うためにも貴重な機会であった。終了後は大学近くのレストラン（飲み屋？）で談笑が続いた。

特別講義 「ロシア革命の歴史的意義」 ロイ・メドヴェージェフ氏

（東京大学文学部布施学術奨励基金より助成を受けての講演会）

1998年10月3日（土）午後3時30分—5時30分

於 東京大学（本郷キャンパス）法文1号館115番教室

主催 東京大学文学部西洋史学研究室（石井規衛）および
同スラヴ語スラヴ文学研究室（沼野充義）

司会・紹介 富田武氏（成蹊大学教授／ロシア史研究会委員長）

コメント 和田春樹（東京大学名誉教授／元社会科学研究所所長）

ロイ・メドヴェージェフ氏は、ロシアの在野の歴史家・政治評論家として国際的に著名な人物。60年代から70年代にかけてのソ連では、ソルジェニーツィンやサハロフとならぶ「反体制知識人」としてその活動・発言が世界的に注目された。日本でも双子の弟ジョレスとの共著を含めるとすでに10数冊の翻訳があり、ロシア関係者の間ではよく知られているが、今回が初来日。来日のきっかけとなったのは、同氏の新著『1917年のロシア革命』の邦訳（現代思潮社、石井規衛監修、横山陽子・北川和美訳）の刊行である。この出版にあわせて著者を日本に招待し、各地で講演をしていただき、ロシアに関心を持つ日本の知識人と直接対話していただくために、「ロイ・メドヴェージェフ氏を歓迎する会」が組織され、彼の初来日が実現した。

東大では来日中の行事の一環として、主としてロシア研究者を対象とした特別講義をしていただいた。講義はロシア語で通訳なしだったため、どの程度聴衆が集まるか主催者側としては不安だったが、定員40名程度の教室が補助椅子を多数持ち込まなければ座りきれないほどの満員となり、熱気ある講義と質疑応答が行なわれた。講義のあとは正門前のレストランを借りきって懇親会が行なわれ、こちらにも20名以上が参加し、和やかな雰囲気のうちにもロシアの歴史と現状をめぐる真剣な議論が続いた。

今回翻訳されたメドヴェージェフ氏の著書『1917年のロシア革命』の訳者は2人ともわれわれのスラヴ語スラヴ文学研究室の大学院生であり、来日中の同氏とのインタビュー・対談記事の翻訳にあたって大学院生が活躍してくれた（『読書人』1998年11月20付け、沼野充義によるインタビュー、北川和美訳、および『世界』1999年1月号、和田春樹氏との対談、守屋愛訳）。

最後に、講義の際の沼野による歓迎の辞の一部を、原文のまま、記録のために転載させていただく。

Приветственная речь для Роя Александровича Медведева

Мицуёси Нумано

Токийский государственный университет

3 октября 1998 г.

В Японии имя Роя Медведева говорит довольно много нам, по крайней мере, русистам. На японский язык уже переведены многие из книг Роя Александровича, в том числе и одна из последних книг под названием «Русская революция 1917 года». (Кстати, эту книгу перевели наши аспирантки, Йоко Йокояма и Кадзуми Китагава, под академическим руководством Господина Исии, профессора Токийского гос. университета.) Но как ни странно, Рою Александровичу до сих пор никогда не довелось приехать в Японию, и вообще не было никакого общения между нами в личном плане. Так что я надеюсь, что сегодняшняя встреча послужит хорошим случаем, который позволяет нам снова, по-настоящему познакомиться друг с другом и что это знакомство приведёт к плодотворным дискуссиям проблем, связанных с историей и современной ситуацией России и также к дальнейшему научному сотрудничеству между нами.

Поскольку я не историк, я просто должен оставить чисто исторические вопросы для историков-русистов, которые сегодня переполнили эту аудиторию, но хотелось бы от себя добавить только несколько слов о том, какое значение имеет фигура Роя Медведева в культурной и духовной истории современной России. Рой Александрович сначала появился в шестидесятые и семидесятые годы перед нами в качестве, прежде всего, одной из самых ярких фигур диссидентства, или «инакомыслия», если хотите, рядом с Сахаровым и Солженицыным. С тех пор много воды утекло и советское и русское общество подвергнулось очень резким изменениям и кризисам, и параллельно с этими общественными переменами многие люди бессовестно изменили своим идеалам и сменили позиции, чтобы выжить и даже получить выгоду от критической ситуации общества.

И сейчас наблюдается печальная ситуация русской интеллигенции по мнению покойного Андрея Синявского, писателя, которого я лично очень любил и оценивал очень высоко. В предсметных лекциях в Колумбийском университете Андрей Донатович очень резко критиковал тех деятелей культуры в России, которые готовы польстить властям, забыв сохранить от них расстояние, необходимое для свободной критики. Но Рой Александрович никогда не принадлежал к такой группе интеллигентов, ведь он твердо остался в своём убеждении в идеале демократического социализма и не перестал быть моральной опорой российского общества. Хотя нынешняя Россия уже вступила в так называемый постмодернистский период, и я

хорошо знаю, что разрыв между поколением шестидесятников и поколением постмодернистов 90-х годов очень большой, но я думаю, что у Роя Александровича, в качестве олицетворения самого лучшего и самого честного духа шестидесятых годов, ещё есть очень много мыслей, которые надо передать нам.

Петр Вайль и Александр Генис, выдающиеся критики современной русской литературы, как-то заметили в своей книге под заглавием «60-е. Мир советского человека» о главной заслуге диссидентства так:

Если раньше общественное мнение выражалось в лучшем случае в заговоре молчания, то теперь оно обрело язык.

Новый принцип – слово вместо молчания – стал главной заслугой диссидентства. Общество уже не могло быть таким же, как прежде: нельзя разучиться говорить.

Рой Александрович всё ещё продолжает говорить -- и сегодня.

特別講義 「モスクワ国立大学における日本研究」

エヴゲニー・マエフスキー氏

(モスクワ国立大学・アジア=アフリカ諸国研究所日本語講座主任)

於 スラヴ語スラヴ文学研究室

1998年10月16日(金) 午後4時50分—6時30分

1998年4月には東京大学と初めてモスクワ国立大学およびロシア国立人文大学と東京大学の間で初めて学術交流協定が結ばれ、東京大学より学術研究奨励資金による国際交流推進経費の交付を受けて、それぞれの大学から1名ずつ日本研究者を短期招聘することができた。招聘の目的は大学間の学術交流を活発化させるため、人的な交流を深め、今後の計画を検討することである。来ていただいたのは、モスクワ国立大学からは、日本語学者のマエフスキー氏(モスクワ国立大学・アジア=アフリカ諸国研究所日本語講座主任)、ロシア国立人文大学からは日本文学者のアレクサンドル・メシチェリャコフ氏。

どちらの大学との協定も「全学協定」であり、特定の学部だけの利害に関わるものではないが、ロシア国立人文大学との交流については当面、総合文化研究科が担当部局となり、モスクワ国立大学との交流については、人文社会系研究科が担当部局となることになっているため、メシチェリャコフ氏の招待については、総合文化研究科の桑野隆教授が責任者となり、マエフスキー氏の招待については、スラヴ語スラヴ文学教室の沼野が責任者となった。

このお二人には1998年10月13日(火)に駒場キャンパスでの日露合同セミナー

一「ロシアにおける日本研究・日本におけるロシア研究」にメイン・ゲストとして出席していただいたほか、メシチェリャコフ氏には10月15日(木)にやはり駒場で特別講義をしていただき、マエフスキー氏には上記の通り、10月16日(金)にスラヴ語スラヴ文学研究室で特別講義をしていただいた。マエフスキー氏の講義は、主に日本語・ロシア語間の翻訳の様々な問題をめぐるものであり、モスクワ大学での長年の日本語教育の経験に基づいた貴重な極めて興味深い話をうかがうことができた。

なお、当日は講義のあと引き続き、マエフスキー氏・メシチェリャコフ両氏を囲んで本郷界限で懇親会を催した。両氏の滞在中の公式行事はこれが最後だったため、実質的には「お別れ会」となり、駒場・本郷からロシア関係者の多くの参加を得て、夜遅くまで談論がはずんだ。

特別講義 「西スラヴ文学におけるポストモダニズム」

ハリナ・ヤナシェク＝イヴァニチコヴァー氏

(ポーランド・シロンスク大学教授)

Professor Halina Janaszek-Ivanickova, "Postmodernism in West Slavonic Literature in the Context of Euro-Atlantic Changes of the Postmodern Paradigms"

1998年11月26日午後5時—7時

於 法文2号館多分野交流演習室

沼野が主査をつとめる大学院博士課程のための多分野交流演習「文化の交通と境界」では、1998年11月26日に、ハリナ・ヤナシェク＝イヴァニチコヴァー氏(シロンスク大学教授/現在北海道大学スラヴ研究センター客員教授)をゲストスピーカーとしてお招きして、特別に講義をしていただいた。多分野交流演習はスラヴ語スラヴ文学専攻の学生のためだけのものではないが、今回の講義は複数のスラヴ文学に関わるものであり、スラヴ専攻の学生には特に興味深いものだった。

ヤナシェク＝イヴァニチコヴァー氏は、現代ポーランドを代表する比較文学者の一人。ポーランド科学アカデミー・スラヴ比較文学部長、同アカデミー学術局副局長、学術誌『パミェントニク・スウォヴィヤンスキ』編集長などの要職を歴任してきた、現代ポーランドを代表する比較文学者の一人である。特にチェコやスロヴァキアを中心とした西スラヴ文学の専門家だが、その視野はグローバルで、今回の講義もスラヴ諸国だけでなく、欧米から中国・日本にまでも目配りをした意欲的なもので、多分野的な刺激に満ちていた。この講義の実現のために尽力くださった北海道大学スラヴ研究センター望月哲男教授や、討論に参加してくださった言語学者/チェコ文学者の千野栄一・和光大学学長を初めとする来聴者

の皆様から心から感謝させていただく。講義は英語で行われたが、討論やその後の雑談では、ポーランド語、チェコ語、スロヴァキア語、ロシア語なども飛び交う状態となり、学生たちはちょっと呆然としたようである。しかし、このように複数の言語が飛び交う状態で知的交流が行われるのも「多分野交流の現場」であり、学生たちにとってはいい刺激になったのではないかと思う。なおこの講義の概要は『多分野交流ニューズレター』第21号に掲載されている。

振りかえってみると、色々な縁があって様々なお客さんに来ていただくことができ、千客万来、まずは充実した交流の年だったと言えるのではないかと思う。この程度のささやかなことを続けるためにも、もちろん、関係者のご好意や尽力、そして陰で準備にあたった学生たちの努力が不可欠だった。協力してくださった皆様に改めて心からお礼を申し上げたい。

また、われわれの学科にもようやく「国際化」の波が押し寄せ、ロシアやポーランドからの留学生が研究室に遊びに来たり、あるいはこちらの学生がロシアに留学したりするのもこの数年来珍しくなくなってきた。こうして見ると、「国際化」が進んで大変結構なようにも思えるが、気がかりなことがないわけでもない。私は1998年3月に国際交流基金の依頼を受け、日露交流活性化の可能性を探るための文化事情調査をロシアで行なったが、そのとき会ったロシア側の日本研究者の中には、「ペレストロイカのおかげで国際交流が自由になり、日本との付き合いも身近なものになった、などと考えたら大間違いだ。社会的混乱の中で、多くのロシア人にとって日本はますます疎遠なものになっている」という逆説的な指摘をする人がいて、ショックを受けた。おそらくその発言には誇張も含まれているのだろうが、「一理」*доля правды* あることも否定できない。

つまり、制度がいかに開放され、機会が増えても、それを積極的に活用しない限り、物事はなかなか進んでいかないどころか、すぐに後退してしまうということだろう。われわれも華々しく前進していくなどという大それたことはゆめゆめ考えずに（そんなことは今の時勢では、スラヴ語スラヴ文学の世界には残念ながら無縁である）、ともかく後退しないために、これからも地道な努力を重ねていきたいと思う。いや、そもそも、外国との付き合いを「国際交流」などともっともらしく呼び、さも特別な活動のように言いたてること自体がおそらく変なのではないだろうか。

(沼野充義・記)

付記 ロシアの大学との学術交流協定の締結について

東京大学とロシアの大学（モスクワ国立大学〔略称 МГУ〕、およびロシア国立人文大学〔略称 РГГУ〕）との学術交流協定締結のための準備が進められてい

たことは、前回の『SLAVISITKA』第13号352ページにも報告した通りだが、幸い、その後関係者の努力が実って、ロシア国立人文大学とは1998年3月23日に、モスクワ国立大学とは1998年4月7日に、それぞれ学術交流協定が締結された。

モスクワ国立大学との協定の場合は、同大学のサドヴニチイ総長が来日の際に東京大学に蓮実重彦総長を訪問され、両総長が署名した協定書を直接交換するという歴史的な調印式が実現した（その場には、本学の側のロシア関係者として、和田春樹名誉教授、桑野隆・総合文化研究科教授と、沼野の3名が立ち会った）。

東京大学がソ連ないしロシアの大学と全学的な学術交流協定を結ぶのは、歴史上これが初めてのことであり、日露両国の関係が新たな段階に入ろうとするいま、両国の大学間でもこのような形で学術交流を深めようとする機運が高まってきたことは、歓迎すべき第一歩であろう。当面、東大側で、ロシア国立人文大学との交流に関する折衝を担当するのは総合文化研究科、モスクワ国立大学との交流に関する折衝を担当するのは人文社会系研究科となるが、これらの協定は「全学協定」として位置付けられるもので、特定の学部・部局だけの利害に関わるものではない。どちらの大学との交流も、われわれの学科の教官・学生全員にとって大きな意味を持つものであり、今後、両大学との間で留学生のやりとりや研究者の交換など、様々な形での交流の機会が増えることが期待される。

* * * * *

俳優セルゲイ・ユルスキー氏と

バレエ評論家ヴァジム・ガエフスキー氏を迎えて

モスクワは演劇の都でもあり、町のいたるところに散らばる大小の劇場では、夜ごとにさまざまなバレエやオペラ、ストレートプレイやコメディが上演され、都市生活の重要なパートをになっている。1998年には、幸い、ロシア演劇に関連するイベントが続き、このうち、劇団銅鑼の招聘で『ヨン・ガブリエル・ボルグマン』（イプセン原作）を演出するために来日したロシアの名優セルゲイ・ユルスキー氏を4月9日に、またバレエ・リュスとセルゲイ・ディアギレフをテーマに行われた「東京の夏音楽祭」のシンポジウム参加のために来日した、バレエ評論家でありロシア人文大学の演劇評論家主任でもあるヴァジム・ガエフスキー氏を7月21日に研究室へ招き、話を伺う機会を得られた。日頃は残念ながら触れる機会になかなか恵まれないこれら芸術ジャンルについて、演じ手および評論家の、ともにモスクワの第一線で活躍する人々に親しく接することが出来たのは